

第26回

「母さん、僕のあの帽子、 どうしたでしようね」

今から41年前の昭和52年、出版業界だけでなく、興行界・歌謡界を巻き込んで大きな話題を提供してくれた作品に『人間の証明』がありました。

森村誠一の原作が単行本として刊行されたのはその前年ですが、慣例を破り翌年には早くも文庫化され、大ベストセラーとなります。

それ以前の文庫本のカバーといえば、各社とも格調高い反面、地味なデザインで違いがわかりにくかったものを、角川文庫が横溝正史の文庫カバーで革命を起こしました。

派手なイラストで目を惹かせ、帯には映画のPRを刷り込み、本と映画を連動させるといふ角川商法、いわゆる「メディア・ミックス」ですね。「読んでから見るか、見てから読むか」という名コピーを背景に、同名映画もこの年の邦画興行収入第2位という大ヒットを記録しています(第1位は、『八甲田山』)。

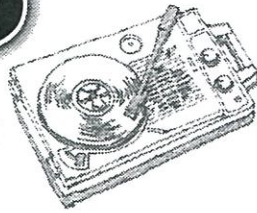
フラワー・トラベリン・バンドのボーカリストだったジョー山中が重

要な役で出演し、主題歌の『人間の証明のテーマ』も歌いました。当時、「ママ、ドゥー・ユー・リメンバー」

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



の歌声が繰り返しブラウソ管から流れてきたので、映画をご覧になっていない方でも記憶にあることでしょう。

小説・映画ともに、幼くして別れた息子の母親に寄せる深い思慕が作品の核になっていますが、その象徴として使われたのが、西條八十の「帽子」という叙情詩でした。

「母さん、僕のあの帽子、どうしたでしようね」と語りかける松田優作のCMナレーションが印象的でしたが、ジョー山中の歌う英語の歌詞はこの詩を英訳したものでした。作詞者名として、「西條八十、角川春樹、ジョー山中」の3名が記載されています(原詩、英訳、英語詞の順だそうです)。

です)。

西條はすでに7年前に没していましたが、一晩で英語の原書1冊を読破するほどの英語力があつた西條なので、生きていれば自ら英訳していたかもしれません。

「帽子」は関東大震災が起こる前年、大正11年に『コードモノクニ』という児童向けの雑誌に発表された作品ですが、西條にはほかに童謡「おかあさん」をはじめ、「母の愛」「母の部屋」といった母を綴った詩が何作も残っています。

西條の戦前の代表作「花も嵐も踏み越えて」で知られるヒット曲『旅の夜風』は、メロドラマ映画『愛染かつら』の主題歌として作詞されたものですが、この映画のものになった小説の原作者・川口松太郎(川口浩のお父さん)は、『愛染かつら』は西條の詩、「母の愛」からヒントを得た、と述べていたそうです。

『人間の証明』を製作した角川春樹は、当時の映画雑誌で、「戦後間もない昭和20年代に大ヒットした三益愛子(川口松太郎夫人)主演の『母の映画』が狙いだつた」旨の発言をしています。西條の「母への想い」と「詩の力」の大きさを痛感するばかりです。